
女性と音楽研究フォーラム 会報 第5号

Bulletin of Women & Music Study Forum Vol. 5 (June, 2005)

目次	2003年度第6回例会発表要旨 (小中慶子) -----	2
	2004年度第1回例会発表要旨 (吉田朱美) -----	4
	2004年度第3回例会発表要旨 (小池智子) -----	6
	2004年度第4回例会発表要旨 (藤村晶子) -----	10
	コンサート報告 (小林緑) -----	12
	会員自己紹介コーナー -----	13
	「Donne in Musica」と「女性と音楽研究 フォーラム」(西阪多恵子) -----	14
	女性と音楽研究フォーラム規約 -----	15
	ニュース etc. -----	16

2003年度第6回例会 発表要旨

日時：2004. 2. 29 (日) 9:00~12:00

会場：中野区女性会館 研修室

書評：“*Alma Rosé Vienna to Auschwitz*” by
Richard Newman with Karen Kirtley
(Amadeus Press, 2000)

小中 慶子 (こなか けいこ)

本書は、アウシュヴィッツの収容所で亡くなったヴァイオリニスト、アルマ・ロゼー (1906.11~1944.5) の生涯について描かれたものである。ハードカバーで出版された後ペーパーバックとなった。英語の原書が出た際に“The New York Times”を初めとする多数の書評で好評を得たほか、ドイツ語にも翻訳され、“Spiegel”誌の書評でも好評を得ている。

アルマ・ロゼーは、女性ヴァイオリニストとして名前が知られている割にその人物像についてはそれほど明らかにされてこなかった。もちろん、グスタフ・マーラーの妹ユステイーネを母親に、ウィーン宮廷歌劇場のコンサートマスターを務め、ロゼー・カルテットの主催者でもあるアルノルト・ロゼーを父親に持ち、さらに叔父エドゥアルトはチェリスト (彼もマーラーの妹エマと結婚) で兄アルフレッドも音楽学者、というルーマニア出身のユダヤ人音楽家一族の一人であることは知られているだろう (そして、マーラー家もいうまでもなくボヘミアのユダヤ人一家である)。また、彼女がアウシュヴィッツ=ビルケナウ収容所 (第2基幹収容所) で女性オーケストラを組織・指導・指揮し、そこで日常的に優れた演奏活動を行っていたこともある程度知られているかもしれない。しかし、彼女はアウシュヴィッツに移送される前にヨーロッパ全土で音楽家としての名声をすでに確立していたのである。に

も関わらず、そこまで含めた彼女についての資料はほとんどないのだ。これまで出版された彼女に関する資料としては、収容所の中で女性オーケストラ団員として過ごした2人による著書、Fania Fénelon, *Sursis pour l'orchestre, Stock*, (Paris, Opera Munci, 1976)

(邦訳『ファニア歌いなさい』ファニア・フェヌロン 著 徳岡孝夫訳 文藝春秋社 1981) と、Anita Lasker-Wallfisch, *Inherit the truth 1939-1945*, (London, Giles de la mare publishers LTD, 1996)

(邦訳『チェロを弾く少女アニタ アウシュヴィッツを生き抜いた女性の手記』アニタ・ラスカー=ウォルフイッシュ著 藤島淳一訳 原書房 2003) の他、収容所の女性オーケストラ研究である Gabriele Knapp, *Das Frauenorchester in Auschwitz : musikalische zwangsarbeit und ihre Bewältigung*, (Hamburg, Von Bockel, 1996) の3種類が主なものとして挙げられる。しかし、これらの中で主に描かれているのは、いずれも収容所における彼女でしかない。しかも、アルマを音楽的には高く評価しつつ「人間的に冷たく強情、自己中心的」と手厳しく評した声楽家フェヌロンに対し、反論としてチェリスト、ラスカー=ウォルフイッシュが著書を出版したと言われている経緯を見ても、前二者はたいへん貴重な証言であるにしても、ある特定の個人のみから見たアルマの印象が描かれているに過ぎないとも言える。

そういう状況下で出版されたこの書物について、特筆すべきは著者である音楽評論家・ジャーナリストであるリチャード・ニューマンが、編集者でアマデウス・プレスの編集ディレクターも務めたカレン・カートリーとの20年以上の歳月に渡る共同作業により、アウシュヴィッツ内外で彼女と関係のあった100人以上の人々 (うち、収容所オーケストラメンバーは23人) へのインタビューを実施し、それをもとに構成したものであるという点、すなわち、様々な視点から多角的に描かれたアルマ像が理解できる初めての書物である、という点にあるだろう。もうひとつ、本書全約

400 ページのほぼ半分を割いて、収容所移送前のアルマの人物像や活動について書かれていることにも注目したい。

さて、アルマの兄アルフレッド (1902~75) は生き延びて戦後カナダの西オンタリオ大学音楽学部教授を務めたが、戦後すぐにこの地でニューマンと知り合った。アルフレッドは 1963 年にニューマン夫妻を遺言執行人として指定したが、これと時期を前後して両家の交流が深まり、ニューマンがアルフレッド家の倉庫に眠っていた 60 通以上のアルマの手紙を見せられたことをきっかけとしてこの本が生まれたという。また、マーラー研究者として名高いラ・グランジュが、マーラー関係の資料をアルフレッドから借用し、アルフレッド死去後に完成した本をアルフレッドの妻マリアに渡したときに、一緒にフェヌロンの著作も渡したところ、これを読んだマリアが、これは本当のアルマ像ではないから何とかしないといけないと思った、ということもこの書物の成立に関係しているようだ。

この書物で明らかにされたことはあまりに多く、到底ここで紹介しきれものではないが、いくつか取り上げておこう。まず、彼女が収容所に入る前、ウィーンですでに女性オーケストラを作っていたことは注目に値するだろう。当時すでに、カフェやレストランで演奏する女性オーケストラはいくつかあったものの、アルマは経済的に誰かに依存することなく、レベルの高い演奏活動ができる音楽集団を作りたいと考えたようだ。声楽家も含むこの女性オーケストラはアルマの厳しい指導のもと 1933 年にデビューし、ヨーロッパ主要都市で大好評を得た。が、この 1933 年というのはナチス・ドイツが台頭した年でもあり、実際ミュンヘンでは演奏を中止させられるなど苦労もしたようだ。このあたりの諸々の事情を読むだけでも、この書物の意義はあるだろう。また、アルマはプライドが高く、常に音楽のことで頭が一杯だった、とフェヌロンが語っているのは、数多くの証言から見ても事実のようである。音楽のことばかり考えていたせいか、叔父

マーラーと違って、彼女は自分がユダヤ人であるという意識をほとんど持っていなかったという。彼女はチェコ人ヴァイオリニスト、プシホダとの最初の結婚を解消したあと、非ユダヤ人と結婚したほうが安全かもしれないという周囲の配慮によって 42 年にオランダ人チェリスト、ボーンカンブと結婚し、短い幸せな生活を送ったが、その年のうちに収容所に移送されてしまった。この、「自分がユダヤ人であるという意識をほとんど持っていなかった」ことからわかるように、彼女のある部分能天気とも見える性格が、状況に敏感なフェヌロンたちとそりが合わず、手厳しい評価となったのかもしれない。しかし、収容所の女性オーケストラ団員は 49 名、うち収容所解放直前に亡くなってしまったアルマ以外の 48 名は全員生還しており、厳しい指導を通して彼女たちの生きる気力を収容所解放まで支え続けたという点から見ても、やはりアルマの功績は偉大だったといえるのではないだろうか。

以上、この本で初めて明らかにされてきた部分からいくつか取り上げてきたが、これらの事実を明らかにしただけでもこの書物の意義が十分に理解されるだろう。巻末にはアルマ周辺の家系図や多数の参考文献、インタビューに応じた人々の名前や収容所でのオーケストラメンバーの名前も列挙されている。もし、欠点を挙げるとすれば、年表がついていないこと、またアルマの手紙も含めて日付なしの資料が多いこと（もともと日付のない資料も多いらしい）、そして、取り上げ方がやや小説がかっており、もう少し客観性がほしいと思われる部分も多々あったこと、等が挙げられるかもしれない。しかし、それらを勘案しても、やはりこの書物が出たことの意義は大きいと思われる。これを契機として、さらにアルマ・ロゼーやアウシュヴィッツの女性オーケストラ、あるいは収容所での音楽活動などについて研究が進められることを願ってやまない。

2004年度第1回例会 発表要旨

日時：2004. 4. 25 (日) 9:00~12:00

会場：中野区女性会館 研修室

作曲する女性たちを描いた19世紀末イギリス小説— Mona Caird, *The Daughters of Danaus* および Stanley V. Makower, *The Mirror of Music* を中心に—

吉田 朱美 (よしだ あけみ)

「女に作曲は可能なのか？」この「女性作曲家をめぐる問題(Woman Composer Question)」は少なくとも過去100年以上にわたって、さまざまな議論・理論を生み出してきた。作曲活動を男性に限定された行為と考える風潮は、現在に至るまで根強い。イギリスの美学雑誌 *The British Journal of Aesthetics* の2000年に出された特集号、“1960-2000: Aesthetics in Britain”の巻頭には、Gordon Graham による、「音楽の中の女性 (“Women in Music”）」という論文が載せられている。その中で Graham は西洋音楽の歴史の中に、「偉大な女性作曲家」が見あたらないという現象について考察を試みる。

「男性中心的な歴史観による選別により、女性作曲家が見過ごされてきたのではないか」、あるいは「女性たちは、特定の目標を目指さないように教えられてきた結果、その目標を追求するための自信を失ってきたのではないか」という可能性が Marcia Citron らフェミニズム批評家によって近年指摘されてきていることは知っていながらも、Graham はそれらの可能性を認めようとしな。表向きは「われわれは生物学的な説明を有してはいない」と述べてはいるものの、Graham の次の文は結局、女性作曲家が少数であるという現象を、生物学的決定論によって説明しようとしているような印象を与える：「男性と女性との間に重要な差異が存在するということは動かせない事実なのだ。…現在

および未来永劫、子どもを産むのは女性だけである。男性が羨んだところで、この事実が変わりはない。では、重要な楽曲を作曲できるのが男性だけだとしても、そのことによって、自分の地位や尊厳を気にかける女性たちが落胆しなければならないいわれがあるだろうか？」しかし、この「女性は出産という機能で満足しろ」と聞こえかねない Graham の言い分こそ、まさに19世紀中葉から綿々と語られ、女性から作曲の機会を奪ってきた一連の理論を受け継ぐものではないのか。

本発表で中心的に扱う Mona Caird, *The Daughters of Danaus* (1894)^{註1} および Stanley V. Makower, *The Mirror of Music* (1895)^{註2} の2篇の小説は、ともに作曲する女性を主人公としている。女性をめぐる当時の社会状況を三人称の語りを通じてリアリスティックに描き出す *The Daughters of Danaus* (以下 *DD* と略記) と、既存の音楽作品についての美学的考察を多く含む幻想的な日記の形式をとる *The Mirror of Music* (以下 *MM* と略記) とでは語りの手法の面からも、一見全く異なる印象を読者に与えるかもしれない。だが両者に共通する大きなテーマがある：天才的な作曲能力を持つ女性と、その才能を発揮させまいと抑圧する社会との葛藤の物語である。

DD の主人公 Hadria は独身時代には「女の子ががんばるのは利己的なこと」という母親によって、結婚してからは「女の義務」という言葉を振りかざす夫によって能力発揮のための時間もエネルギーも奪われる。おまけに周囲の人々の大半は「自己犠牲こそが女性の美德」と信じて疑わない。ついに意を決して夫の許を離れ、フランスで作曲活動をはじめた Hadria だが、パリの一流音楽家から「天才」という評価と、才能を環境の犠牲にしないようにとのアドバイスをもらった矢先、母が病気で倒れたとの知らせが届く。これ以上の心労をかけると命が危ない、母親のどんな希望にも従うようにとの医者からの指示で、自分の才能をとるか母親の生命をとるか究極の選択を迫られた Hadria は、再び家庭の中に引き戻されてしまうのであった。

MM の主人公 Sarah Kaftal の祖母は才能あるピアニストであったが、Robert Schumann の『謝肉祭』

からの一曲を演奏中に狂気に陥りそのまま亡くなった。やはり誰よりも深く音楽を理解する Sarah が「プロの音楽家になりたい」と言い出したとき、父親は「そんなことを考えてはいけない」という。娘が祖母の轍を踏むのではと恐れたのだ。「身体にさわるから」と作曲することも、ピアノに触れることも、ものを書くことも禁じられながらも、Sarah は家族の目を盗んで作曲と日記の執筆を続ける。そして完成した交響曲の楽譜を抱え、理解を得られそうな唯一の人物であるバイオリンの名手の男性のもとに走る。交響曲は初演の機会を得て成功に終わるものの、終演後に倒れた Sarah が意識を取り戻すと、たった一人で独房に閉じ込められているのに気づく。Beethoven, Schumann, Wagner につづく新しい世代の天才として造形されている Sarah はこうして「狂気」のカテゴリーに囲い込まれてしまう。彼女の死後、人々は「革新的な作曲家」として“Kaftal”という姓を知ってはいても、その作曲家が女性であったことは忘れ去っているのである。

この二つの作品がともにフィクションであり、資料として用いる上で慎重さが要求されることは言うまでもない（発表では Carol Neuls-Bates の *Women in Music* などからの史料も適宜参照する）。しかし、これらの小説に共通してみられる問題意識や、女性の作曲行為を阻む多数者側の登場人物の用いる論理などはたしかに当時の社会状況を照らし出しているようであるとはいえないか。そこで描かれる、女性の創造性や独創性を否定し型にはまった生き方を押し付けようとする社会的・文化的圧力は、いかに才能ある女性からであっても自己実現の機会を奪い去りかねないほどに強い。

プロットの上だけ見ると悲劇的・悲観的な傾向が強いように思われるかもしれないこれらの二作品だが、希望がないわけではない。天才的な女性の悲劇を提示するとき、そこには言葉の力に対する信頼、読者に対する信頼、そして音楽の力に対する信頼があったのではないか。MM が、まさに女性の天才の存在を否定した Schopenhauer の天才概念を当てはめながら天才的女性としての Sarah を造形していくとき、また DD が

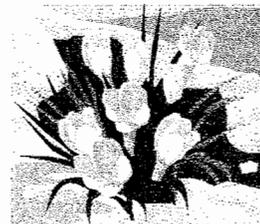
『自然』によって定められたとされている女性の役割の大半が、実は文化的に構築されたものなのではないか」との問題意識を提示するとき、読者はそういった女性像や問題意識を共有するよう促されるであろう。

E. F. Benson の小説 *Dodo* (1893) には、実在の女性作曲家 Ethel Smyth をモデルにしたと思われる Edith という登場人物が出てきて、以下のように言う：「人々が自分で気づかず持っている感情や考えを音楽は認識可能にする」。DD の Hadria も MM の Sarah も、世界の真理を深く見通す能力に長け、当時の女性をめぐる状況に対してとりわけ敏感である。だが、彼女たちの直面する問題は決して例外的な一部の女性たちだけのものではなく、特に DD においてはすべての女性の生き方に関わるものとしてあらわされている。自らを「バッカスの」と形容することもある Hadria の音楽は社会秩序を揺るがすような破壊力をもち、Nietzsche の言う「ディオニュソスの音楽」を想起させる。それはまた、たとえまだ無意識のうちであつても多くの人に共有されているはずの問題や感情に形を与えようとする音楽である。

「個人の力で環境を変えることはできるか？」— DD の中で Hadria が繰り返し発する問いである。Hadria の孤独な闘いは物語の中では挫折に終わる。しかし、その闘いが同様の意識を共有する多くの仲間とともに闘われるものとなったら、という願いが作中にはこめられているのだ。

注1) Caird, Mona. *The Daughters of Danaus* 1894. New York: Feminist Press at the City University of New York, 1989.

注2) Makower, Stanley V. *The Mirror of Music*. London: John Lane, 1895.



2004年度第3回例会 発表要旨

日時：2004. 8. 7 (土) 9:00~12:00

会場：中野区勤労福祉会館 談話室

バロック時代(1600-1750)のイタリア人 女性作曲家

小池 智子 (こいけ ともこ)

現在のイタリアという国に相当する地域は、バロック時代には音楽において、欧州をリードする存在であった。にもかかわらず、現在ではイタリアのバロック音楽が演奏される機会は、残念ながら日本はもとより世界的にみても決して多くはない。私がイタリアでバロック音楽を中心に活動し始めてから出会ったイタリア・バロック音楽の数多くの作曲家と彼らの作品を、もっと日本に普及させるためにどのようにアプローチすべきかを思案していたところ、この時代の数人の女性作曲家の存在とそれらについて研究・演奏する団体を知った。丁度私も、イタリアで共にバロック音楽を学んだ日本人女性5人で演奏グループを結成し活動を始めたところだったので、この時代の女性作曲家について調べてみることにした。すると、意外なほど隠れた女性作曲家が多いことが分かったのである。事実、私もそれまでは、作曲家ジュリオ・カッチーニの娘フランチェスカ・カッチーニや詩人ジュリオ・ストロツィの養女バルバラ・ストロツィぐらいしか知らなかったのであるが、この時期のイタリア人女性作曲家のほとんどは、他国のそれと比較すると圧倒的に作品数や出版楽譜数も多いのにもかかわらず、その存在すらほとんど知られていないのである。

そこで、まずここでバロック時代のイタリア人女性作曲家と作品を整理してみたい。

I. バロック時代の女性作曲家とその作品

作品の後ろの()内は、作曲年あるいは出版地・年、および所有図書館・出版社。

♪は、例会当日試聴した曲。()内は演奏団体名。

1) Paola MASSARENGHI (Parma 1565?)

- 2) Leonora ORSINI /ORSINA(ca.1560・Roma 1634)
“Per pianto la mia carne”
- 3) Vittoria ARCHILEI (Roma 1550・Firenze 1618?)
- 4) Caludia CATTANEA
- 5) Caudia SESSA (ca.1570 - 1617?)
“Occhio io vissi di voi” “Vattene, pur lascia” in <Canoro Pianto dei Maira Vergine> di Angelo GRILLO (Venezia 1613) ♪”Occhio io vissi di voi”(Cappella Artemisia)
- 6) Raphaela ALEOTTI (1570 - ca.1620)
<Sacrae cantiones quinque, septem, octo et decem vocibus decantande>(1593) ※宗教曲上の女性初出版
- 7) Cesarina Ricci De TINGOLI
<Madrigali a 5 voci con un dialogo a otto> (Venezia 1597)
- 8) Vittoria ALEOTTI (1573・ca.1620)
<Il Giardino de' musici ferraresi>(1591)
<Ghirlanda de madrigali a 4 voci>(1593)
- 9) Sulpitia CESIS (1577 - dopo1619)
<Motetti spirituali a 2,4,5,6,8 e 12 voci> (Modena 1619)
- 10) Adreana Baroni BASILE (Posillipo ca. 1580 - 1640)
- 11) Francesca CACCINI (Firenze 18.9.1587 - 1641)
<Il ballo delle Zigane> (Firenze 1615)
<Il primo libro delle Musiche a una, due e tre voci>(Firenze 1618 / F・BN)
♪”Dispiegate guancie amante”(La Primavera)
<La liberazione di Ruggiero dall'isola di Alcina>(Firenze 1625 / SPES) ※女性初また伊国外で上演された初の伊オペラ
- <Il Rinaldo innamorato>
- 12) Lucrezia Orsina VIZIANI / VEZZANA (Bologna 1590 - 7.3.1662)
<Componimenti musicali da mottetti concertati a 1 e piu' voci> (Venezia 1623)
<Concerti musicali>
- 13) Alba TRISSINA (Vicenza ca.1590 - dopo1638)
“Sacri fiori” in<libro quarto> di Leone LEONI (Venezia 1622 / PL・Kj)
<Componimenti Musicali>(Venezia 1623)
- 14) Caterina ASSANDRA (Pavia 1580 - 1609)
<Mottetti, op. 2> (Milano 1609)
♪”Duo Seraphim”(Cappella Artemisia)
- 15) Lucia QUINCIANI (-1611-)

- in <Affetti amorosi> di Marc'Antonio NEGRI (Venezia 1611)
- 16) Settimia CACCINI (1591 - ca.1660)
Autori diversi (I-Bc) ♪"Gia' sperai"(La Primavera)
- 17) Claudia Francesca RUSCA (1593 - 1676)
<Sacri Concertati a 1-5 voci con Salmi e Canzoni francesi a 4 ...> (Milano 1630)
♪"Gaudate gaudio Magno" (Cappella Artemisia)
- 18) Chiara Margarita COZZOLANI (1602 - ca.1677)
<Primavera de fiori musicali> (Milano 1640 / lost)
<Concerti sacri a 1-4 voci con una Messa, op.2 >(Venezia 1642)
♪"Bone Jesu, fons amoris"(Magnificat)
<Scherzi di sacra melodia a voce sola, op.3> (Venetia 1648)
<Salmi a 8 concertati et 2 Magnificat a 8 ... Mottetti e dialoghi, op.3> (Venezia 1650)
♪"Deus in adiutorium" (Magnificat)
- 19) Francesca CAMPANA (ca.1605 - 1665)
<Arie a 1-3voci> (Roma 1629 / I-Bc)
- 20) Leonora BARONI (Mantova 1611 - 1670)
- 21) Marieta Morosina PRIOLI (-1665)
<Balletti et Correnti a 2 violini et violone aggiunta la spineta >(Venezia 1665 / I-Bc) ※女性初の器楽曲
♪"Corrente Seconda"(La Primavera)
- 22) Barbara STROZZI (Venezia 6.8.1619? - ca.1664)
<Il primo libro di modrigali a 2-5 voci, op.1 >(Venezia 1644 / I-Bc)
♪"Quante volte" (La Venexiana)
<Cantate, ariette e duetti, op.2> (Venezia 1651 / GB-BM)
<Cantate ariette a 1-3 voci, op.3> (Venezia 1654 / GB-BM / A-R)
<I sacri musicali affetti, op.5> (Venezia 1655 / PL-WR)
<Ariette a voce sola, op.6> (Venezia 1657)
<Diporte di Euterpe overo cantate e ariette a voce sola, op.7> (Venezia 1659 / SPES)
<Arie, op.8> (Venezia 1664)
- 23) Isabella LEONARDA (Novara 6.9.1620 - 25.2.1704)
<Motetti...libro primo a 3 voci, op.2>(Milano 1665 / lost)
<Sacri concerti a 1-4 voci, op.3> (Milano 1670)
<Messa e salmi, concertati e a cappella con istromenti ad libitum a 4 voci e 2 violini, op.4> (Milano 1674)
<Motetti a 1 voce e 2 violini, op.6> (Venezia 1676 / I-Bc)
<Motetti...con le litanie della beata vergine a 1-4 voci e 2 violini, op.7>(Bologna 1677)
<Vespro a della beata vergine e motetti concertati a 1-4 voci, op.8> (Bologna 1678 / I-Bc)
<Motetti con litanie della beata vergine a 4 voci, op.10> (Milano 1684)
♪"Ave Regina Coelorum" (Cappella Artemisia)
<Motetti a voce sola, op.11> (Bologna 1684 / I-Bc)
<Motetti a voce sola, op.12> (Bologna 1686)
<Motetti a 1-3 voci e 2 violini, op.13> (Bologna 1687)
<Motetti a voce sola, op.14>(Bologna 1687 / I-Bc)
<Motetti a voce sola, op.15> (Bologna 1690 / I-Bc)
<Sonate a 1-4 istromenti op.16> (Bologna 1693 / I-Bc / A-R) ※女性初の出版ソナタ作品
♪"Sonata duodecima in D minore per 1 violino e b.c."(Bizzarie Armoniche)
<Motetti a voce sola, op.17> (Bologna 1695 / I-Bc)
<Messa concertate con stromenti e motetti a 1-4 voci e 2 violini, op.18> (Bologna 1698 / I-Bc)
<Salmi concerdtati a 4 voci e 2 violini, op.19 >(Bologna 1698)
<Motetti a voce sola e 2 violni, op.20> (Bologna 1700 / I-Bc)
In <Terzo libro de sacri concetti> di Gasparo CASATI (Venezia 1640)
- 24) Antonia BEMBO (Venezia ca.1643 - ca.1715)
<Produzioni Armoniche>(Paris 1697-1701 / F-BN)
♪"Lamento della Vergine" (Bizzarie armoniche)
<Erocle amante, Te Deum, Divertimento> (Paris 1707)
- 25) Cornelia Maria Caterina CALEGARI (Bergamo 1644 - Milano 1662/64)
<Mottetti a voce sola >(1659)
<Madrigale e canzonette a voce sola>
<Madrigali a 2 voci>
<Messa a 6 voci con instrumenti>
<Vespri per uso delle religiose>
- 26) Leonarda CALEGARI (- 1687 -)
<Mottetti a una, due e tre voci con violini e senza> (Bologna 1687)
<Mottetti a voce sola> (Bologna 1695)

- <Mottetti concertrati a piu' voci> (Bologna 1695)
- 27) Maria Xaveria PERUCORA (ca.1652 - dopo1709)
<Sacri concertri de motetti a 1-4 voci parte con violini...opera prima> (Milano 1675 / I-Bc)
- 28) Maria Francesca NASCIMBENI (Ancona 1658 -)
<Canzonie madrigali morali e spirituali a 1-3 voci> (Ancona 1674)
- In <Motetti a 2 e 3 voci> di Scipione LAZZARINI (Ancona 1674)
- 29) Rosa Giacinta BADALLA (ca.1662 - ca.1715)
<12 Motetti a voce sola> (Venezia 1684)
♪"O Serene pupillae" (Cappella Artemisia)
- 30) Bianca Maria MEDA (ca.1665 - post 1700)
<Motetti a 1,2,3 e 4 voci con violini e senza> (Bologna 1691)
♪"Cari musici" (Bizzarie Armoniche)
- 31) Caterina Benedicta GRAZIANINI (1680? -)
<Santa Teresa Oratorio a 4 voci con stromenti> (O-NB)
<Oratorio di S.Gemignano Vescovo e Protettore de Modona> (ms 1705 / O-NB / ClarNan)
- 32) Camilla de ROSSI (-1707 - 1710)
<Santa Beata d'Este> (ms 1707 / O-NB / ClarNan)
<Il sacrificio di Abramo> (ms 1708 / O-NB / ClarNan)
<Il figliuol prodigo> (ms 1709 / O-NB)
<Sant' Alessio> (ms 1710 / O-NB)
<Cantata a 2, Dori e Fileno> (Dresden - SLB)
- 33) Maria Margherita GRIMANI (-1713 - 1718)
<Pallade e Marte> (ms 1713 / O-NB)
<La decollazione di San Giovanni > Battista (ms 1715 / O-NB)
<La visitazione de Santa Elisabetta> (ms 1718 / O-NB)
- 34) Francesca CUZZONI (Parma 1700 - Bologna 1770)
<Il Palladio Conservato> (London 1742)

ここに挙げた女性作曲家の出身および身分を分類してみると、主に修道女、芸術家の家庭に生まれ育った者、また貴族・有産階級の女性達に分けられる。

II. 出身・身分

- 1) 修道女 () 内は女子修道院名
C.SESSA (S.Maria Annunciata) , R.&VALEOTTI

(S.Vito / Ferrara) , S.CESIS (S.Agostino / Modena), L.O.VIZIANI (S.Cristina / Bologna), C.ASSANDRA (S.Agata / Lomello) , C.SESSA (S.Maria Annunciata / Milano), C.M.COZZOLANI (S.Redegonda / Milano), C.FRUSCA (S.Caterina / Milano), I.LEONARDA (S.Orsola / Novara), C.CALEGARI (S.Margherita / Milano), L.CALEGARI (S.Orsola / Bologna) , M.X.PERUCORA (S.Orsola / Galliate), B.M.MEDA (S.Martino in Leano / Padova), R.G.BADALLA

2) 芸術家の娘・妻

V.ARCHILEI (音楽家A.アルキレイの妻), A.B.BASILE (詩人 G.B.バジーレの妹、カラブリアの貴族 M.バローニの妻), F.CACCINI (音楽家 G.カッチーニの娘、音楽家 G.B.シニョリーニの妻), S.CACCINI (音楽家 G.カッチーニの娘、音楽家 A.ギヴィッツアーニの妻), C.C.ATTANEA (音楽家 C.モンテヴェルディの妻), L.BARONI (A.B.BASILE の娘), B.STORZZI (詩人 G.ストロツィの娘), F.CUZZONI (ヴァイオリン奏者 A.クツォーニの娘)

3) 貴族・有産階級の出身 *印は修道女

P.MASSARENGHI, L.ORSINI (セーニ公爵夫人), R.&VALEOTTI* (フェラーラ・エステ家アルフォンソ II 世の宮廷の建築家の娘), C.SESSA*, S.CESIS*, L.O.VIZIANI* (ボローニャの貴族), C.FRUSCA, C.M.COZZOLANI*, I.LEONARDA (法律家 G.A.レオナルダの娘), C.CALEGARI*, B.M.MEDA*, A.BEMBO (医者 G.パドアーニの娘、貴族 L.ベンボの妻)

次に、彼女達の作品を種類別に分類してみる。修道女の中には世俗的声楽曲を作っている者もいるが、彼女らが貴族や有産階級の出であることから、修道院で作曲法を学んだのではなく、修道院に入る前にすでに趣味や教養のひとつとして作曲法を身につけていたと推測する。

III. 作品分類

- 1) 宗教曲 (ミサ曲、オラトリオ、モテットなど) *印は修道女

R.ALEOTTI*, S.CESIS*, F.CACCINI, L.O.VIZIANI*, A.TRISSINA, C.ASSANDRA* , C.FRUSCA*, C.M.COZZOLANI*, B.STROZZI, I.LEONARDA*, A.BEMBO, C.CALEGARI* L.CALEGARI*, M.X.PERUCORA*, M.F.NASCIMBENI, R.G.BADALLA*, B.M.MEDA*, C.B.GRAZIANINI,

C.ROSSI, M.M.GRIMANI

2) 世俗的声楽曲 (マドリガーレ、カンタータなど)

C.SESSA*, L.ORSINI, C.R.TINGOLI, VALEOTTI*,
F.CACCINI, L.O.VIZIANI*, L.QUINCIANI,
S.CACCINI, F.CAMPANA, B.STROZZI, A.BEMBO,
C.CALEGARI*, M.F.NASCIMBENI, C.ROSSI,
F.CUZZONI

3) 器楽曲

C.FRUSCA, M.M.PRIOLI, I.LEONARDA

4) 歌劇

F.CACCINI

最後に、現在イタリアにおいてこれらの女性作曲家を研究、あるいは彼女らの作品を演奏する注目すべき団体と、お薦めのCDを挙げておく。

IV. 活動団体

FONDAZIONE ADKINS CHITI :

<http://www.donneinmusica.org/>

クラシックだけに限らず、音楽全般において作曲家・演奏家・音楽学者など音楽に関わる女性による音楽を促進するべく世界的な活動を行い、高い評価を獲得している団体。

ASSOCIAZIONE ENSEMBLE ISABELLA
LEONARDA : <http://www.isabellaleonarda.it/>

I.レオナルダに由来して名付けられ、主にバロック時代の女性作曲家を研究し、演奏活動も行っている。

V. 演奏団体

CAPPELLA ARTEMISIA :

<http://www.cappella-artemisiam.com/>

女性のみ声楽家、器楽奏者によって結成され、特にルネッサンスとバロック時代の女子修道院での音楽を演奏している。

CD : 「Mottetti Spirituali / S.CESIS」, 「Rosa Mistica」,
「Cantinel Chioistro」
「Vespri Natalizi / C.M.COZZOLANI」 (TACTUS)

BIZZARRIE ARMONICHE :

<http://www.cappella-artemisiam.com/>

バロック音楽の演奏で大変評価の高い演奏家によるグループ。この2、3年イタリアにおいてこの時代の女性作曲家に目が向けられる大きなきっかけとなった。

CD : 「Donne Barocche」 (OPUS111) , 「Armonie Barocche ~Tre donne in musica~」 (ORF)

VI. その他のCD () 内は、演奏団体およびレーベル名

「Primo Libro de' Madrigali / B.STROZZI」 (La Venexiana / CANTUS)

「Arias & Cantatas / B.STROZZI」 (La Risonanza / Glossa)

「Tesori del Piemonte vol.5 / I.LEONARDA」
(Cappella Strumentale di Novara / OPUS111)

「Concerto delle Donne」 (La Primavera / Ligia Digital)

「Messa Paschale / C.M.COZZOLANI」 (Magnificat / musica omnia)

「Vespro della Beata Vergine / C.M.COZZOLANI」
(Magnificat / musica omnia)

これらのCDに収録されている曲は、単旋律と通奏低音の小編成の物からより大規模な作品まで多様であり、宗教作品も世俗作品も変化に富んだ様式によって書かれている。その作曲技法も同時代の男性作曲家に決して引けを取らない。

演奏者も、繊細かつ大胆、時に感情豊かな作品の特徴を、イタリア的なドラマティックさを持って見事に再現している。

日本においても、これらの作品や演奏が聴衆の耳に触れる機会が増えることを切に願うものである。

<参考文献>

「ニューグローブ世界音楽大事典」 (講談社)

「Women Composers : Music Through the Ages, Vol.1&2」
(G.K.Hall & Company)

「Donne in Musiche」 (Patricia Adkins Chiti / ARMANDO EDITORE)

2004年度第6回例会 発表要旨

日時：2004. 9. 11 (土) 9:00~12:00

会場：中野区女性会館 研修室

統合十年・ドイツ現代音楽のいま—〈非対称性〉のゆくえ

藤村 晶子 (ふじむら あきこ)

本発表は、統合から十余年を経たドイツ現代音楽の動向を、「非対称性」という視点を導入しつつ考察するものである。これまで、ドイツの現代音楽をめぐる言説にはつねに幾つかの留保が付きまどってきた。その多くは、二つの異なる政治体制下に形成された東西ドイツの音楽が、それぞれの戦後空間の相違を反映し、相互に合わせ鏡のような道を辿ってきたという歴史的経緯に依っている。ドイツ統合は実質的には西による東の経済的吸収であったが、文化面においては何かがどのように変容したのか。またそこに「女性」という要素は、どのように関わっているのだろうか。

0. 前提

まず、戦後ドイツの現代音楽がはらむ特異性を幾らか詳らかにしておく必要があるだろう。そもそも現代芸術は近代が培った規範や価値観に対する懐疑、アンチテーゼとして生まれたが、とくに音楽においては第二次大戦後にさまざまな次元での解体が進行した。その時点までの西洋芸術音楽を担っていた主たる主体は、当然ながら、ヨーロッパ人、キリスト者、男性であり、規範の枠外にいた他者とは、非ヨーロッパ人、非キリスト者、女性である。およそ雑駁ではあるが、このような整理が可能だろう。つまり現代音楽とは、従来の主体の領域に「他者」が侵入していく、元来が論争的な現象なのである。

戦後のドイツは第二次大戦の戦争責任を厳しく問

われ、その代償としてドイツ国家は東西に分断された。「過ぎ去ろうとしない過去」(ナチズム)は大きな禍根となって独特の文化的土壌を形成するにいたる。だがその反面、過去への視線は東西それぞれにフィルターがかかり、冷戦構造の対立を補強するようにも機能した。東ドイツにおいては「ファシズム文化」との対決が至上命令とされ、ナチスドイツとは無縁という立場が取られた。結果、同時代にあつては社会主義リアリズムの音楽が、また、J.S.Bach, Beethoven, R.Schumannら「ドイツの歴史的遺産」の継承が奨励されることにもなる。1960年代後半に入ると、西側情報の遮断および東側知識人の囲い込みが行なわれ、東の文化は孤立を深めた。他方、西ドイツではさまざまな国際的ネットワークの拠点がつくられ、ダルムシュタット夏期講習会のほか、各地の放送局、演奏団体、音楽祭などを連携させた音楽運営(Musikbetrieb)の助成による新しい音楽市場の創出に力が注がれた。東西の違いこそあれ、それは「それぞれの」現代音楽が戦後社会の中で一定の「地位」をもち、制度化していく過程であったということができよう。

1. 統合ドイツの直面した問題

このように多元的な戦後を抱えた東西ドイツは1990年に再統合されるが、それは「一つの国家の中に二つの全く異なる構造をもつ社会を成立」¹⁾させることでもあった。そして90年代のドイツ音楽界は、東西間の「非対称性」の均質化へと向かう。戦後や東西再編をテーマにした音楽祭がドイツ各地で開催され、CDや出版物の刊行も相次いだ。多くの音楽家が「公務員」であった旧東ドイツの受けた打撃はとくに大きく、CD製作や音楽祭は彼らの延命策という一面ももっていた。だが、東西の差異は解消されるばかりか、むしろ断絶の深さが浮き彫りになっていくのである。

女性の問題も例外ではない。音楽の現場に関わる女性たちの声としては、1992年に7名の作曲家へのインタビュー集 *Komponistinnen der Neuen Musik* が出版され²⁾、また1994年の雑誌 *Neue Zeitschrift fuer Musik* の特集「女性と音楽」には種々の音楽関

係者へのアンケートがなされている^{註3}（両資料ともに回答7名のうち東ドイツ出身者は2名）。旧東ドイツの女性音楽家たちはいずれも、これまで活動において性差の不平等を感じることはなかったと述べており、社会主義体制下に「少なくとも政治的・制度的には職場における男女共同参加がかなり進んでいた」^{註4}事実を窺わせる。だが一方で、彼女たちは東ドイツ社会を代表するエリートであり（Ruth Zechlin, 作曲家、オルガニスト、ハンス・アイスラー音大教授、Romely Pfund, 新ブランデンブルク・フィルハーモニー音楽総監督）、その活動も「東」の内に囲い込まれた、かなり限定されたものであった。さらに、同時代の国際的な音楽語法は東ドイツでは1980年代まで公的に封印されていたのであり、エリート音楽家たちは良くも悪しくもそのような現実に適応しつつ、国内の「不平等」に加担していた側面もあるはずである。しかし統合後はそういった東ドイツ国内の非対称性は等閑視され、あらたに「自由主義体制下での女性の〈不自由〉という逆説」^{註5}さえもが浮上した。90年代半ばまでのドイツは、一筋縄ではいかない多様な差異が、複数の次元で明らかになっていく時期であった。

2 1990年後半以降の動向

発表では最後に、現在ドイツ語圏を主な活動拠点とする若い世代の動向に触れた。詳細は割愛するが、言及した人々は下記のとおり。Isabel Mundry(作曲家、1963)、Anette Schluenz(作曲家、1964)、Eggert Moritz(作曲家、1965)、Thomas Bruns(室内アンサンブル・ノイエムジークベルリン主宰、1964)、Christian Kesten(作曲家、パフォーマー、1966)、西風満紀子(作曲家、1968)、Olga Neuwirth(作曲家、1968)。(順不同、数字は生年を表す)。彼らは「壁」崩壊の頃に学生時代を送っており、音楽に限らず世界規模の情報が共時的に受容可能になった最初の世代といえる。国籍、言語、性差、さらに音楽/演劇/美術など既存の категорияに拘ることなく活動している人々も多く、その点ではまさに「ボーダーレス(境界なし)」の恩寵を一身に受けているかのようだ。だが他

方、いまや従来の「東西」「男女」といった二項対立構造ではもはや捉えきることのできない階層的差異が、国際社会のあらゆる場所で顕在化しており、個々の状況の周縁化はますます進んでいる。一見ボーダーレスな音楽が、このアンバランスな現況とどう批評的に対峙し得るものか、気がかりである。

90年代のドイツが行なった戦後回顧とは、人々の証言、史料、作品再演などによる過去の再編成、つまり「歴史化」の作業であった。それは並行して、東西間の差異や非対称性を回収し、新たな制度化の地均しをはかるものでもあった。私にはその「歴史化」作業の道程が、50年前の「ナチスドイツの過去の克服」と二重写しに見えるのである。制度への批判なき埋没は何としても避けねばなるまい。そのためにも、カテゴリー内部の差異を精査し続ける必要がある。

<注>

(注1) 坪郷寛「国民国家と新しい市民社会の狭間で」『ヨーロッパ=ドイツへの道』東京大学出版会、1996年。

(注2) *Komponistinnen der Neuen Musik*, Berlin, 1992.

(注3) “Ging unser Aufbruch ins Leere? 17 Jahre Frauen-Musik-Bewegung” IN: *Neue Zeitschrift fuer Musik*, 1994/4, S.10-16.

(注4) 仲正昌樹「ドイツ語圏におけるジェンダー研究のパラダイム転換」『ヨーロッパ・ジェンダー研究の現在——ドイツ統一後のパラダイム転換』(仲正昌樹編、御茶ノ水書房、2001年)、3-17頁。

(注5) 姫岡とし子「ドイツ統一十年とジェンダー」上掲書、96-120頁。

なお、発表では戦後ドイツの音楽情勢を概観する一助に東ドイツ現代音楽年表と東西ドイツで活動する作曲家一覧を作成、添付したが、ここでは割愛させて頂いた。



ルイズ・ファランク生誕200年記念

コンサート報告

小林 緑 (こばやし みどり)

当フォーラムの企画・主催になる「女性作曲家を聴く・その6＝ルイズ・ファランク生誕200年記念コンサート」が、予定通り昨年10月30日(土)午後、東京文化会館小ホールにて、恙無く終了した。

当日は朝からあいにくの空模様、またさまざまなイベントが集中する文化的・ハイ・シーズンに重なったこともあり、当初目論んだ「満席」には至らず、実数およそ360人程度の入りであったが、終了後のアンケートの回収率もよく、そのほとんどが大変に好意的・積極的な賛同の声であったことから、主催者自らが吐く言葉ではないかもしれぬものの、一応「大成功」と記させていただく。

その第一要因はフルートの佐久間由美子、ヴァイオリンの松原勝也を始めとする総勢10人の演奏陣が、期待通りの力量を発揮してくれたことにある。幕開けのフルート三重奏曲こそ、私にはいささか速すぎるテンポと感じられたものの、続く五重奏(ピアノ+弦4部)、六重奏(ピアノ+管5部)、そして九重奏(弦4部+管5部)と、終結に向けテンションが加速度的に高まり、満場が気持ちをひとつに聴き入っているという雰囲気を感じられた。とくに九重奏曲は弦楽器の大小4種全部とホルンを加えた木管5種という、9つの異なる楽器がずらりと並ぶ編成が珍しく、視覚的にも訴えるところが大きかったのではないかと。他方、この九重奏曲のみ外れたピアノの長尾洋史の弾きぶりも実に鮮やか、フンメル+メンデルスゾーン+ツェルニーを混ぜ合わせたようなファランクのピアノ様式的美質を十分に味わうことが出来た。

加えて、演奏者が終演後の雑談のなかで、「なんだかファランクにはまりそう!」と言葉を掛け合う一幕もあり、作品そのものを演奏の当事者にも喜んでいただけた証左、と意を強くした次第である。これを敢えて記したのは、寄せられた感想の大部分が演奏の素晴らしさにもっぱら心[耳?]奪われたという内容で、作品そのものへのコメントが少なかったため、本コンサートの起点である「女性作曲家を聴く」目的意識が、お客様の中でやや曖昧になってしまっていたのか、と心配になったからだ。もっとも、ファランクの個人様式に触れたわずかな発言の中で共通したのが「ファランクは少しもフランス的ではな

い、どう聴いてもドイツ的だ、なぜ?」というもの。ここでの「フランス的」という意味合いは、おそらくフォーレやドビュッシー流の旋法的な特徴を指していると思われるが、1850年代に実質的な作曲活動を終えているファランクに、そのような様式感は当てはめられないということをご理解いただければ幸いである。

総計15の楽章から成るソナタ構成の4曲—実はプログラミングの過程で、少し重く長すぎるのでは、という不安が抜け切れなかった。しかし、演奏者が提示部の繰り返しを省くというオプションをとったことも手伝ってか、退屈や冗長さをほとんど感じさせる間もなく終えられたことにホッと安堵—2時間半近くを想定していた演奏時間がお陰さまで少し短縮されたので、これなら九重奏曲からスケルツォあたりをアンコールすればよかったか、と悔やんでもみたほどである。

最後に、シリーズ企画を立てている以上、大まかながら次回コンサートの予告をするのが筋であろうが、今回は残念ながら、まだその状態にない。しかし「継続は力なり」。女性の音楽的創造性を正しく認識することを通じて、男性中心社会のひずみを正す一助にと願う私たちフォーラムの志は、何らかの形で次に受け継がれるはずである。どうぞ辛抱強く見守り、サポートいただけるよう、改めて心よりお願いしたい。

付記：当コンサート終了後、私の知る限り、新たにファランク作品二つが日本国内で演奏されている。一つはピアノ五重奏曲第二番ホ長調作品31で、「田村宏p室内楽新シリーズ10(最終回)」にて、岡山潔(vn)、店村眞積(va)、河野文昭(vc)、永島義男(cb)という顔ぶれ、2005年3月20日、東京藝術大学奏楽堂。このコンサートの前日に足を捻挫するというアクシデントに見舞われた私は痛恨の極みながら聴きそびれてしまった。もう一つは「フルートとピアノのための協奏的大変奏曲」で、2005年3月12日、西荻窪勤労福祉会館にて、永井由比(fl)と山内のり子(p)の組み合わせ。杉並区と同区女性連合団体が主宰、私が企画にあたった「素晴らしい女性作曲家たち」と題するレクチャー・コンサートの一環である。前者<五重奏曲>は「日本初演」と明記されていたが、後者<大変奏曲>も楽譜は公開されておらず、CDも皆無。フランス国立図書館所蔵の手書き譜を用いての演奏であったから、もちろん日本初演に当たろうし、ひょっとしたら〔作曲者の没後における〕世界初演であったかもしれない。

「Donne in Musica」と

「女性と音楽研究フォーラム」

西阪 多恵子(にしざか たえこ)

昨年12月、ドンネ・イン・ムジカより、当女性と音楽研究フォーラムに世界音楽フォーラム(2005年10月ロサンジェルス)参加の呼びかけがありました。「通信」でお知らせしたので、ご記憶の方も多いでしょう。ドンネ・イン・ムジカの正式名称はFondazione Adkins Chiti. Donne in Musica(以下DiMと略)、1978年に声楽家・音楽学者のパトリア・アドキンス・キティによって創設されたきわめて意欲的な「財団」です。そして当フォーラムはその国際名誉委員会の一員とされたのです! いったいどうして?と思われるでしょう。

4年程前、IAWM 国際女性音楽連盟メーリング・リストに投稿した際、DiM 会長アドキンス・キティ氏から日本の「音楽における女性」関係の組織について問い合わせを受けましたので、当フォーラムと日本女性作曲家連盟について簡単な情報を送りました。その後2、3度メールを交わし、音楽祭の案内などがDiMから小林代表や私のアドレスに届いたこともあります。とはいえ、昨年12月、当フォーラムがDiMの国際名誉委員会のメンバーと認められ、DiMの企画への参加やウェブサイト上でのニュース掲載ができたの知らせを受けたときには、驚き以上に釈然としない思いがしたものです。希望したわけでもないのに…と。やがてDiMのパンフレットや関係書籍が送られてくるにおよんで、金銭的な面での不安も湧いてきました。そこで、なぜ私たちが国際名誉委員になったのか、問い合わせたところ、その答えは——とりあえず胸をなでおろしつつも、複雑な思いにかられるのですが——「国際名誉委員への招聘は、ここ何年間か貴団体のはたらきに注目した結果、当財団との互いの協力を推進するために財団理事会が決定したものです。貴方の義務は唯一、国際名誉委員会のメンバー全員が署名した使命にできる限り従うということであり、出費にはおよびません。私たちのネットワークによるこそ」

この「使命」とは、DiMのウェブサイトwww.donneinmusica.orgに「私たちの使命」として日本語を含めて18カ国語で書かれているも

のです。地域や時代、ジャンルを問わず、女性によるあらゆる音楽の促進をめざすというその内容もさることながら、さまざまな言語のヴァージョンを掲載するという姿勢そのものがDiMの国際性を象徴するように思われます。私たちフォーラムへの眼差しと呼びかけは、きっとその延長線上にあるのでしょう。

創立以来、音楽祭、コンサート、シンポジウムなどの開催、ラジオ・テレビ番組の製作、研究出版など多岐にわたる活動を続けてきたDiMのネットワークは現在116カ国に及んでいます。非営利文化組織であるDiMは、ユネスコ国際音楽評議会、欧州音楽評議会のメンバーであり、またイタリア内外の行政機関等と協力関係を保ち続けながら、活動経費をすべて寄付や助成金でまかっています。もちろんこうした諸団体・機関との関係は、財源獲得のためだけではありません。昨年は欧州議会に対し、非営利組織への資金提供の不透明性について疑問を呈した結果、欧州の「音楽における女性」組織すべてがその申請資格を得るといった成果を挙げたそうです。(わが日本でも、科学研究費の性別による偏りが指摘されたばかりですね…)

DiMの出版物には、西洋音楽における女性の歴史を概説した*Donne in Musica* (1982)、11世紀から17世紀までのイタリア女性の創造をとりあげた論文集*Una visione diversa* (2003)、18世紀後半のイタリア作曲家コッチアの研究*Maria Rosa Coccia* (Candida Felici 著 2004)があります。(いずれもイタリア語。後者2点は英語の要約付)

今後、女性と音楽研究フォーラムとDiMとの関係はどのようになるでしょう。多くのすぐれた音楽家や音楽研究者に恵まれ、豊かな音楽文化を享受しているはずの日本において、まがりなりにも(?) DiMと連絡をとりあう組織が我がフォーラムだけという現状は、なんとも寂しい限りです。音楽における女性組織として、日本からの発信や貢献が乏しいのはどうしてなのでしょう。DiMの国際名誉委員という肩書きには今一つ実感がわからないのですが、当フォーラムの充実と発展が国内外の「音楽における女性」の意識を高め、協力関係を築いていくよう、願わずにはられません。

付記: DiMの国際名誉委員についてはフォーラムの承認を得るべき事柄と思われまふ。近々の例会であらためてご報告し、ご承認願いたいと思ひます。

ニューズ etc.

■ 「ピアニスト=コンポーザーとしての女性たち」～ コンサートのお知らせ

国立音楽大学創立 80 周年記念事業の一環として、当フォーラム代表小林緑企画・構成による「ピアニスト=コンポーザーとしての女性たち—デュオ作品をめぐって」と題するコンサートを次のように開催します。

日時：2005年9月30日(金) 18:30

会場：国立音楽大学講堂小ホール

出演：河村初音(ピアノ) / 三木香代(ピアノ)

企画構成・お話し：小林緑

プログラム

第1部 連弾作品：A.ビーチ<夏の夢>op.47、F.メンデルスゾーン、M.ジャエル作品ほか

第2部 二台ピアノ作品：C.シャミナード<アンダンテとスケルツェットィーノ> ほか

チケット：一般¥2,000 学生¥1,000 (全席自由)

チケット取り扱い：電子チケットぴあ
0570-02-9990 / 国立楽器北口本店
042-573-1111 / 国立楽器音大店
042-535-9518 (学生券は国立楽器音大店のみ)

■ 女性作曲家作品をリクエスト!

またまた IAWM 国際音楽女性連盟の話題。今年初め頃から、メーリングリストで、ラジオの音楽番組に女性作曲家作品をリクエストしようというキャンペーンが始まりました。例えば「今週はイザベッラ・レオナルダを」との唱道委員会のメッセージとともに、リクエストの文章例が掲載されるのです。こんな具合—拝啓 イザベッラ・レオナルダの作品をお願いいたします。このイタリア修道女(1620-1704)の作品は CD や LP になっております。もしもお持ちでない場合は、IAWM のウェブサイト www.iawm.org をご覧になり、他の女性作曲家の作品をお聴かせ下さい。現存作曲家の作品の情報はサイトの「メンバー」へ、歴史的な女性作曲家の作品について

は、「教育」次に「リソース」をクリックします。どうぞよろしく—— というわけで、作曲家の一口情報も IAWM の宣伝も兼ねてのリクエスト。当の作曲家の CD がなければ他の女性作曲家を、と簡単に言うてしまうところは、あれ?! という感じもしますが、こういう場面で、女性作曲家なら何でもいいのか、などと考え込んでいては事は進まないのかもしれない。個々のリクエストには直接応じられなかったとしても、同時期にさまざまなラジオ局に女性作曲家作品のリクエストが寄せられることによって、女性作曲家作品への認識が広まっていくのでしょうか。ちなみに、放送関係の情報で目立ったものとしては、リリ・ブランジェ作品の5日間にわたる特集番組(毎日1時間、BBC)、ファニー・メンデルスゾーン2回連続特集番組(1回1時間半、CBC)などでしょうか。(いずれも2005年1月)

■ ラトビア現代音楽

現代ラトビア音楽のコンサートが今年9月23日、武蔵野市民文化会館において昼夜に渡って開かれます。主催のゼメネ音楽企画によると、ラトビアは女性の活躍が著しい社会で、大統領も文化大臣も国立学校の校長先生も女性、作曲家や音楽関係団体の代表者なども女性の比率が高いそうです。さらにラトビアが誇る3大文化人はすべて女性—詩人アスパジャ、文学者ゼンタ・マウリニャ、そして作曲家のルーツィヤ・ガルター—とのこと。主催者のご好意により、ガルター他3人の女性作曲家の作品を含む本コンサートに、当フォーラムのメンバーを招待して下さるそうです。ご興味のある方は事務局までご連絡下さい。

<編集後記>

第5号のお届けが大変遅くなりました。諸般の事情の中、無事刊行できただけでも大きな喜びです。「継続は力なり」。 (市川・西阪)

女性と音楽研究フォーラム会報 第5号

Bulletin of Women and Music Study Forum Vol.5

編集・発行 女性と音楽研究フォーラム事務局(市川啓子・西阪多恵子)

発行日 2005年6月18日(土)